

氏名	村松 由貴
ヨミガナ	ムラマツ ユキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第682号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）欲望の受け皿-コスプレと承認と愛と- （作品）ぼくらの愛らんど

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	中村 政人
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	荒木 夏実
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小林 正人
（副査）	筑波大学	教授	（美術学部）	齋藤 環

（論文内容の要旨）

本論は筆者が名乗る「ユッキユキ」という作家の作品について「欲望の受け皿」という観点を軸に考察した制作論である。

「欲望の受け皿」とは、自分と社会、虚構や現実などといった複数の境界領域をつなぐ、いわばフィルター、メディア、仮面、皮膜のような装置である。日常的な例として、自分の理想の姿に近づくよう自撮りに加工フィルターやエフェクトを重ねSNSに投稿し他者の反応を楽しむなど、自身に何層もの皮膜を重ねて見せる行為がある。この皮膜を通した自画像は自分自身の理想の姿、すなわち自らの欲望や願望が投影されており、現実と理想を近づける救済措置として生み出された依代のようなものでもある。これを筆者は「欲望の受け皿」と称することとした。「欲望の受け皿」は自分の欲望に気づくための装置であり、救済装置でもある。そして同時に他者の欲望も受け止める。SNSに投稿された皮膜を通した自画像に対して、他者はそれを承認し楽しみ消費する。「欲望の受け皿」を前提としてコミュニケーションを楽しむのである。

その「欲望の受け皿」の効果に気づいたきっかけが《学生ニート それでも私は出たくない》(2012)という作品である。この作品は自宅の生活空間と展示空間を中継し、スクリーン越しに筆者と対話ができる作品である。筆者が対人関係の悩みから引きこもり状態になった時に、相手を目の前にして対話をしたくないという切実な願いから制作した。その結果中継スクリーンという皮膜を一枚挟むことで、人々が筆者に対して生身で対話するときよりも優しくなったり関心を持ってくれたりと、接し方の違いが顕著に現れた。この時の中継スクリーンは言わば「欲望の受け皿」であり、筆者自身と鑑賞者のコミュニケーションを円滑にする効果があった。おそらく中継スクリーンという皮膜によって生身の肉体が所有する過剰な情報が遮断され曖昧になり、安心して相手と話すことができたからではないだろうか。さらに言えば筆者はその作品において、日常での他者との直接的な対話より、中継スクリーン越しの対話の方が、情報が曖昧になる分相手に対してしがらみがなくなりその相手へ真実味（リアリティ）を感じたのである。

その芸術実践をするための装置として、筆者は2013年から「ユッキユキ」という作家を筆者の「欲望の受け皿」としながら作品制作を始めた。本名の筆者が作品を考案する演出家だとすると、「ユッキユキ」は筆者の欲望を受け止め、皮膜を何層にも重ねた演者であるといえる。つまり逆に言えば筆者自身に「ユッキユキ」という皮膜を被せ、さらに作品に何層もの皮膜を重ねなければ表現行為ができないのである。この皮膜は筆者の感覚的には全て半透明で薄いものである。いくら重ねても筆者自身がほんのりと透けて見える。全くの別物、代替え物ではなくユッキユキに重なった薄い皮膜の層をめくっていくと筆者自身に行き着く。

これまでユウキユキの作品はアイドル、コスプレ、BL（ボーイズラブ）といったオタクカルチャーと密接に関わりながら、さまざまな関係性をつなぐ「欲望の受け皿」という装置を主題にし、その効果を芸術実践で検証してきた。本論では筆者がユウキユキというアーティストを「欲望の受け皿」として用いてどのような表現をしてきたかを紹介し、その意味を現代社会の問題と重ねながら分析する。

第1章の変身という「欲望の受け皿」では、まずユウキユキの誕生に決定的影響を与えたコスプレ文化とその拡張表現について考察する。

また自身の経験に基づいてコンセプトカフェという約束事の世界で行われる愛情の消費や承認欲求について言及し、その約束事の世界での承認のやりとりを作品化した自作《ユキテラス大御神  天岩戸伝説》(2016-2018)について解説する。

第2章の「血縁を編み直す、解く」では筆者の承認欲求の根源である母と娘の関係性において、インナーマザーについて述べる。そして筆者と母にとっての「欲望の受け皿」をモチーフに、母と娘の関係性の編み直しをした作品《「あなたのために、」》(2019-2021)を解説する。またこれまで母と娘の関係性がどのように描かれてきたのか先行事例を取り上げる。

第3章の「解かれる役割、その先の愛情」では《「あなたのために、」》に組み込まれた「男装のコスプレ同士のBLによる愛情」を描いた映像について解説する。ユウキユキの作品におけるBLの表現に着目し、なぜそれが必要だったかを分析する。

終章では「欲望の受け皿」の効果として自らが望まない役割を他者から欲望されることの問題提起をするために、ファンとアイドルの関係性を描く自作品《孤毒なピンク》(2020)について言及する。そしてこれまであげた「欲望の受け皿」の効果とその定義を再確認し、今後の制作における展望の実践として提出作品《ぼくらの愛らんど》(2021)について解説し、今後の展望を述べ総括する。

(論文審査結果の要旨)

村松由貴は「ユウキユキ」というアーティスト名を名乗ってさまざまな制作活動を行ってきた。ユウキユキをアバターのように用いてそこに自身の願望を重ねつつ、本人を超越する表現に挑戦してきたといえる。本論文で村松は、ユウキユキを自身と他者を結ぶ「欲望の受け皿」として捉え、作品論を展開している。

自身の制作のルーツがコスプレであることを認識する村松は、キャラクターへの愛とDIY的クリエイティビティ、自己表現、さらにコミュニティを通じた情報交換と交流など、コスプレイヤーの精神と行動を読み解きながら、それを土台にしたユウキユキ独自の表現方法について述べている。さらにコンセプトカフェにおける客とキャストの関係性、母親との共依存関係、BLの概念における欲望のねじれなどについて自身の経験を振り返り、欲望の受け皿がどのように機能してきたかを検証する。修了制作として発表した《ぼくらの愛らんど》において、男女という性差を超越した世界を前向きに描いた村松は、自分史におけるさまざまな問題と自作の変遷を重ね合わせながら、自身の分身であり表現媒体であるユウキユキを丁寧に分析している。

村松は極めてパーソナルなできごとを作品テーマとして扱ってきたが、それらは現代を生きる多くの人々に共有されうる切実かつ今日的な問題でもある。適応障害、引きこもり、承認欲求、共依存やジェンダー。今現在も村松の眼前には、出産という女性に課せられる人生の重大事やそれにまつわる社会からのプレッシャーが進行形で迫っている。かくも深刻な「自分ごと」に真っ向から対峙し、斬新な表現を探究してきた村松の真摯かつアグレッシブな姿勢が、作品の魅力として多くの人々に認められてきたのだと思う。本論文は、これまで村松が直感的に制作に用いてきた方法論をより客観的に分析し、言語化する好機となった。個人の強い必然性が今日の社会的問題と結びつき、アーティストィックな提案へとつながる意義のある研究として評価する。

(作品審査結果の要旨)

ユウキユキの作品「ぼくらの愛らんど」は輝かしいアート作品だ。

アートだという理由は、或る特定のカルチャーや人種、性別を超えて見る者の心を揺さぶり「えっこれは何?!」と考えさせるものだって事だ。

「ぼくらの愛らんど」はそれ以前の作品の二項対立（まあそれだってインナーマザーには第3の像が入り、なんとか母娘の関係をフラットにしたいという…村松の必死で闇雲な足掻きで作品は結果的に二項対立といったstereotypeの図式じゃなくなってるけど）を取っばらった新しい<セカイ>を見事に開示している。三つ巴の三匹にヒエラルキーは無い…支配欲、所有欲を持たないように映像は進んでいく。当然<戦い>は無い。ジャンケンをして負けたものが出産する。ポコポコと泡が産まれては消え、その無数の泡のひとつひとつに<好き>と三匹が呟いてる様に見える。

この三匹はユウキユキ=本当の村松由貴だ。

産まれた子どもはいったい誰なんだろう？

一答えはどうでもいい。

ARTを英英辞典で引くと” Making, or expression of what is beautiful “ とある。ビューティフルなことを表現する。ビューティフルなものをつくる…。ユウキユキの「ぼくらの愛らんど」は自らの欲望に忠実であろうと徹するエゴアティテュードによってむしろ新時代の多くの人々が“幸せになれる方法”を指し示す。荒木夏美さんは100点でもいい。と言った。俺もそう思う。論文は点数がつけられる。「減点するところがないんですよ」というのはつまりアーティストだ！って事さ。

(総合審査結果の要旨)

村松由貴は自身の作家名、制作活動を次のように考えている。「2013年から「ユウキユキ」という作家を筆者の「欲望の受け皿」としながら作品制作を始めた。本名の筆者が作品を 考案する演出家だとすると、「ユウキユキ」は筆 的欲望を受け止め、皮膜を何層にも重ねた演者であるといえる。つまり逆に言えば筆者自身に「ユウキユキ」という皮膜を被せ、さらに作品に何層もの皮 を重ねなければ表現行為ができないのである。」これは、油画専攻に入学し画家としての資質とコスプレ文化の聖地である秋葉原でコスプレヤーとして活動してきた両方のアイデンティティの成立がクロスしながら本論での表現動機、制作方法、発表方法、それぞれに皮膜を重ねるように独自の手法を発展させ制作してきた。コスプレのための舞台を3次元空間で制作し結果、写真・絵画という二次元空間に表現を展開するのもそのコスプレ文化からの技術的な手法も含め高い完成度となっている。

また、大型のインスタレーション作品「あなたのために、」では、「作品のテーマである母と娘の 関係性係性に着目し、母/娘問題とは何か、その解決の困難性について、母/娘問題をより 複雑化させるインナーマザーの存在について述べている。」この作品の中心には、作者が実の母とともに毛糸で編んだ巨大な「サン子ちゃん」という人形が配置され、内部にはB L（ボーイズラブ）をテーマにして映像作品が上映されている。作者の何重にも重なった精神の皮膜が構造化、可視化された完成度の高いインスタレーションとなっている。

映像作品「ぼくらの愛らんど」においては「3人で行う生殖の関係性はどのようなものが望ましいのだろうか。それは3人がそれぞれオスやメスなど役割を持たず、一緒に生殖を行くこと。そこにあるのは相手を思いやる気持ちで成立する関係性がよいと感じた。」と論考しているようにその映像美は、人間の生理的

機能を超えたユウキユキの理想世界が描かれている。

論文のタイトル「欲望の受け皿」― コスプレと承認と愛と―が示すように「ユウキユキ」は、コスプレ文化から自己の承認欲求、性差を超えた愛の形を受けとめる皿として作者自身が何役も演じるアーティストとしての現代社会の複雑化したアイデンティティを表出することに成功している。

論文、作品とも審査員一同、高い評価で博士課程合格とした。

今後、世界のアートシーンにおいての活動が期待される。